

かみや治兵衛
さいの國や小春

心中天の網島

作者 近松門左衛門

さん上云々―意
味なく口均子に
唱へる當時の流
行唄

大海―蛭て大海
を載るの詠を用
ゐたり

紋日云々―節句
に行くと妓に契
りて行かぬ爲仲
居が景清と成て
客の三保谷を捕
へた(謡曲景清)
ふみかぶる―し
てやられる
南の風呂―小春
はもと洲女なれ

歌さん上ばつからふんごろのつころ、ちよつころふんごろで、まてとつころわつからゆ
つくるくく、たがかさをわんがらんがらす。そらがくんぐるくも、れんけれんけ
ればつからふんごろ」妓が情の底深き、是から戀の大海を、替へも干されぬ蜷川。思ひ
思ひの思ひうた、心がこよろ留むるは門行燈の文字が關。浮れぞめきしあだ淨瑠璃、役
者物眞似なやは歌、二階座敷の三味線に、ひかれて立よる客も有、紋日遁れて顔隠し、仕
過しせじと忍び風。仲居のきよが是を見て、ウタイ三保の谷が著たりける、頭巾の鍔を取
外しく、二三度延延たれ共思ふおてきなれば近さじ、と飛懸りひつたり悪洒落。ごん
せ、と止たる女、景清、鍔と頭巾、ついふみかぶる客も有。橋の名さへも梅櫻、花を揃へ
し其中に、南の風呂の浴衣より、今此新地に戀衣、紀の國やの小春とは此十月に仇し名

ば云
此十月一十月を
小春と云より綴
けたり
呼子鳥一をもち
ちのたつきもし
らぬ山中に覺束
なくも呼子鳥哉
(古今集)
貴面云々一ま目
にかくらねど
むさと一ウカと
警こき一警薄い
ひ
せく一遠にせぬ

のんこ一髪、細
き髪、結方、櫛
草筆記に「系髪
づくりのんこあ
たま」とあり
のら一放蕩者
樊噲流は云々一
渠は匿性爺の九
仙山にある句也

を世に残せとのしるしかや。今宵は誰か呼子鳥、覺束なくも行燈の影、ゆき違ふ妓の立
かへり、「ヤ小春様か何といの。互ひに一座も打絶へ、貴面ならねば便りも聞ず。氣色がわ
るいか顔も細りやつれさんした。誰やらが咄しで聞けば紙治様故。内からたんと客の吟
味にあはんして、何處へもむさと送らぬの、いや太兵衛様に請出され、在所とやら伊丹
とやらへ往かんすはづ共聞及ぶ。どふで御座りやす」と云ければ、少ア、もふ伊丹く
といふて下んすな。夫でいたみ入はいな。いとしほなけに紙治様とわたしが中、左程に
もない事を、あの贅こきの太兵衛が浮名を立て云散し、客と云客は退果、内からは紙屋
治兵衛故じやとせく程にく、文の便りも叶はぬ様に成やした。不思議に今宵は武士衆
とて河庄方へ送らるゝが、かふ往く道でも若し太兵衛めに逢ふかと、氣遣さく。敵持
同前の身持。なんとそこらに見へぬかゑ」嬉々、くそんならちやつと外さんせ。あれ
一丁目からなまいだ坊主が、てんがう念佛申て来る。其見物の中に、のんこに髪結ふて
野良らしい、たて衆自慢と云そな男、慥に太兵衛様かと見た。あれく爰へ」と、いふ
間程なくほうろく頭巾の青道心、墨の衣の玉襷、見物ぞめきに取巻れ、鉦の拍子も出合
ごんく、ほでてんくご念佛に仇口嚙交て、道具屋「樊噲流は珍らしからず、門を破るは

松山一樹久末の
松山に出たる女
主人の名

紺屋云々一與作
跡にある句なり

とつ河内屋と
つかは急忙に
かけたり、河内
屋は河庄の事
花車一河庄の女
主人
李滔天一調性爺
の激役

日本の朝比奈流を見よやとて、貫木逆茂木引破り、右龍虎左龍虎討取て、難なく過る月
日の關や。なまみだなまいだくくく。文彌迷ひ行共松山に、似たる人なき浮世ぞと、泣つ
エ、くくワハくく。笑ふつ狂亂の身の果何と淺ましやと、芝を褥に伏けるは眼も常
られぬ風情。なまみだなまいだくく。歌るいくくく。紺屋の徳兵衛 房にも
とより濃る染込の、内の身代灰汁でもはけず。なまみだなまいだくくく。』
妓「ア、是坊様なんぞ、エ、忌々しい。漸 此比此さとの心中沙汰が鎮つたに、夫をいて
國性爺の道行念佛が所望じゃ」と、杉が袖から報謝の錢。坊主、江戸「只た一錢二錢で三千余
里を隔てたる、大明國への長旅は、あはぬだ佛あはぬだくくく。』ぶつくくいふて行過る。
人立紛れにちよこく走、とつ河内屋に駈込ば、「是はく早いお出。お名さへ久しう云
なんだ。やれ珍らしい小春様く、はるくで小春様」と主の花車が勇む聲。今是門へ
聞へる、高い聲して小春くくと云ふて下んすな。表に嫌な李滔天が居るはいの。密かに
密かに頼みやす」と、いふも洩てやぬつと入たる三人連。太小春殿李滔天とはない名を付
て下された。先禮からいひましょ。連衆、内く咄した、心中よし意氣方よし床よしの
小春殿、やがて此男が女房に持か、紙屋治兵衛が請出すか、張合の女郎。近付に成て置

大坂三郷一南
組、北組天満の
三區劃

身すがら一候累
なき
潛上—高言

はたへた—じや
れて甘へる

鉦の火入云々—
火鉢を鉦の代り
に煙管を撞木に
代用す

や」とのさばりよれば、少エ聞共ない。得知れぬ人の仇名立、手柄にならば精出していはんせ。此小春は聞ともない」と、ついと退けば又措寄、本聞共なく共小判の響で聞せて見せふ。貴様もよい因果じや。天満大坂三郷に男も多いに、紙屋の治兵衛二人の子のおや、女房は従弟同士の舅は伯母聲。六十日々に問屋の仕切にさへ追るよ商賣、十貫目近親、かねた金出して請出すの根引のとは、蟻螂が斧で御座る。我ら女房子なければ、舅なし親もなし伯父持ず、身すがらの太兵衛と名をとつた男。色ざとで潛上いふ事は治兵衛めには叶はね共、金持た計は太兵衛が勝た。金の力で押たらば、なふ連衆、何に勝ふも知れまい。今宵の客も治兵衛奴じや。囉をく、此身すがらが囉ふた。花車酒出しやく」少エ何おしやんす。今宵の客はお侍衆、をつ付見へましょ。お前は何處ぞ他で遊んで下さんせ」と、いへ共はたへた顔付にて、太ハテ刀指か指ぬか侍も町人も客は客。なんほ指ても五本六本は指まいし、よふ指て刀脇指たつた二本。侍ぐるめに小春殿もらふた。抜つ隠れつなされても縁あればこそお出合申。なまいだ坊主のお蔭、ア、念佛の功力有がたい。こちも念佛申そ。ヤ鉦の火入煙管撞木面白。ちやんくちやんちやん歌ゑいゑいくくく、紙屋の治兵衛、小春狂ひが杉原紙で、一分小判紙ちりく紙で、内の

小判紙云々一
分小判を散らす
にかく

くすむ一大小も
男もはてにない
事

はどかる一ひろ
がる
内から云々一紀
園屋より杉が走
つて来た

寄菜一逢ふにか
く

身代漉破紙の、鼻もかまれぬ、紙屑治兵衛。エなまみだ佛なまいだ、なまみだ佛なまいだくく」と、暴れ叫く門の口、人目を忍ぶ夜るの編笠。忝ハア、塵紙わせた。ハチきつい忍びやう、なぜ遣入ぬ塵紙。太兵衛が念佛こはくば南無編笠ももらふた」と、引きさり入たる姿を見れば、大小くすんだ武士の正真。編笠越にぐつと睨たる、まん丸眼玉は敲鉦。念共佛共出ばこそ、「ハア、」といへどもひるまぬ顔。忝なふ小春殿こちは町人かたにさ。刀指いた事はなけれど、己が所に澤山な新銀の光には、少々の刀も捻曲めふと思ふ物。ちりがみやめ。塵紙屋奴が漆漉程な薄元手で、此身すがらと張合は慮外千万。櫻橋から中町下りぞめいたら、どこぞでは紙屑蹂躪つてくりよ。皆おじやく」と身振計は男を磨く、町一ぱいにはどかつてこそ歸りけれ。所柄馬鹿者に構はず堪る武士の客。紙屋くと善悪の噂小春が身に應へ、思ひくづおれ恍惚と無挨拶なる折節、内から走つて紀園屋の、杉がけうとい顔付にて、杉只今春様送つて参りし時、お客様まだ見へず、なぜ見届けて來なんだ、とひどふ吐られます。慮外ながら一寸」と、編笠をしあけ面躰吟味、「ム、そでないくく氣遣なし。跡詰てしつほりと小春様、したどる樽の生醬油。花車様さらば。後に青菜の浸し物」と、口合たらぐ立歸る。至極かた手の侍大きに無興し、侍こりや何じや、人

ないづ云々無
き例なりとてグ
ヅツク

登り詰云々行
き詰つた揚句に
は往々心中をす
るもの

御機嫌よかれ
下に「が」字を入
れて見るべし
わつさり一掃氣

の面を目利するは、身を茶入茶碗にするか。黽れには來申さぬ。此方の屋敷は晝さへ出入かたく、一夜の他出も留守居へ斷り帳に付、むつか敷掟なれ共、お名聞て戀慕ふお女郎。どふごと一座を願ひ、小者も連す先刻參つて宿を頼み、何でも一生の思ひ出、お情に預らふと存じたに、いかなにつこりと笑顔も見せず、一言の挨拶もなく、懷中で錢よむやうに扱々俯いて計。首筋が痛は致さぬか。何と花車殿、茶屋へ來て産所の夜伽する事は、ついにないづ」とぶつよげば、花車「お道理く。いはくを御存じない故御不審の立はづ。此女郎には、紙治様と申深いお客がござんして、今日も紙治様明日も紙治様と、わきから手指もならず。外のお客は嵐の木の葉でばらくく。登り詰てはお客にも、女郎にもゑて怪我の有物、第一勤の妨と、せくは何處しも親方のならひ。夫故のお客の吟味。自然と小春様もお氣の浮ぬは道理、お客も道理、道理々々の中取て、主の身なれば御機嫌よかれ、道理の肝腎肝もん。サアはつと呑かけわさくわつさり頼ます。小春様はる様」と、いへ共何の返答も涙ほろりの顔ふり上、小「あのお侍様同じ死ぬる道にも十夜の内死んだ者は、佛に成と云ひますが定かいな」侍「夫を身が知る事か、檀那坊主にお問なされ」小「ほんにそふじや。そんなら問たい事有。自害すると首くよると

大方の事―よい
加減な事
うてぬ―氣乗り
せぬ

天満に云々―天
満に長く住む紙
屋治兵衛と也
大幣―逢ふにか
く、御幣の事
腐り合ふ―腐り
縁

燈に背けた顔―
白氏文集の映々
殘燈背壁影の句
を取れり
速て云々―小春
を連れて梅田
(墓場)へ行かふ
といふを菅公飛
梅にかけたり
めいる―沈む

は だ さだめし此喉を切かたが、たんと痛いでござんしよの」侍、痛むか痛まぬか切ては見
ず。大かたの事問はつしやれ。ア小氣味の悪い女郎じゃ」と、流石の武士もうてぬ顔。
花車「エ、春様、初對面のお客にあんまりな挨拶。少と氣をかへどりやこちの人尋て來て
酒にせふ」と、立出る門は宵月の、影傾ぶきて雲のあし、人足薄く成にけり。天満に年
ふる千早振る、神にはあらぬ紙様と世の鰐口にのる計。小春に深く大幣の、腐り合た
る御注連繩。舞今は結ぶの神無月、せかれて逢れぬ身と成果、あはれ逢瀬の首尾あらば、
夫を二人が最期日と、名殘の文の云かはし、毎夜々々の死覺悟、玉しひ抜てとほく、う
かうか身を焦す。煮賣屋で小春が沙汰、侍客で河庄方と、耳に入より、治「サア今宵」
と、覗く格子の奥の間に、客は頭巾を、願の、いづく計に聲聞へず。可愛や小春が燈に、
背向た顔のあの瘦た事はい。心の中は皆己がこと。爰に居ると吹込で、連て飛なら梅田
か北野か、エ、知らせたい呼たい」と、心で招く氣は先へ、身は空蟬の脱殻の、格子に抱
付あせり泣。奥の客が大欠「思ひの有女郎衆の御伽で氣がめいる。門も靜な、端の間へ
出て、行燈でも見て氣を晴そふ。サアござれ」と連立出れば、治「南無三寶」と、格子の
小陰に片身をすほめ、隠れて聞共内にはしらず、侍「なふ小春殿、宵からの素振詞の端に

笑止一氣の毒

しん八幡しん
は眞、偽りなく
の意色外に云々上
に思内にあれば
を収す(假託)

氣を付れば、花車が咄しの紙治とやらと心中する心と見た、違ふまい。死神付た耳へは、
 異見も道理も入まじとは思へ共、去とは愚痴のいたり。先の男の無分別は恨ず、一家
 門そなたを恨み憎しみ、萬人に死顔晒す身の恥。親は無かも知らね共、若しあれば不孝
 の罰、佛は愚地獄へも暖かに、二人連では墮られぬ。痛はし共笑止共、一見ながら武士
 の役、見殺しには成がたし。定て金づく、五兩十兩は用に立ても助けたし。しん八幡侍
 冥利他言せまじ、心底残さず打あけや」と、さよやけば手を合せ、少ア、忝い有がた
 い。名染よしみもない私、御誓言での情のお詞、涙がこぼれて忝い。ほんに色外に顯
 るでござんする。如何にもく紙治様と死ぬる約束。親方にせかれて逢せも絶へ、指合
 有て今急に請出す事も叶はず。南のもとの親方と爰とに、まだ五年有年の中、人手に
 取れては私ほもとより主は猶一分立す。いつそ死でくれぬか。ア、死にましょと引にひ
 かれぬ義理詰に、ふつと云交し、首尾を見合せ合圖を定め、抜て出よふ抜て出よ、とい
 つ何時を最期共、其日送りの敢ない命。私一人を頼みの母様、南邊に賃仕事して裏家
 住。死んだ跡では袖乞非人の飢死もなされふか、と是のみ悲さ。私とても命は一つ、水臭
 い女と思召も恥かしながら、其恥を捨て死ともないが第一。死なずに事の濟む様にどふ

何の因果云々
小春が契約に背
くはあさんの頼
みによつてなり
ど性骨！ど根
性、どは罵聲
障子！しようか
にかく
くらしー殴る
事
關條六一名高き
刀匠にて名は兼
元

ぞく頼みやす」と、語れば頷く思案良。外にははつと聞驚く、思ひがけなき男心、木から落たる如くにて氣もせき狂ひ、追扱は皆嘘か。エ、腹の立、二年といふ物化された。根生腐りの狐め踏込で一討か、面恥かよせて腹るよか」と、齒切りく口惜涙。内に小春がかこち泣、卑怯な頼み事ながら、お侍様のお情、今年中來春二三月の比迄、私に逢ふて下んして、彼の男の死に來る度毎に、邪魔に成て期を延しく、をのづから手を切ば、先も殺さずわたしも命助かる。何の因果に死ぬる契約した事ぞ。思へばくやしうござんす」と、膝にもたれ泣く有様。侍ム、聞届けた思案有。風も來る人や見る」と、格子の障子ばたくと、立聞治兵衛が氣も狂亂。追エ、さすが賣物め。ど性骨見違へ玉しひを奪はれし巾著切め。切ふか突ふかどふ障子にうつる二人の横良。「エ、くらはせたい踏たい。何ぬかすやら頷き合、拜む呷くほへるさま、胸を押へさすつても堪へられぬ堪忍ならぬ。心もせきに關の孫六一尺七寸拔放し、格子の挟間より小春が脇腹、爰ぞと見極め、忍いと突に座は遠く、是はと計怪我もなく、すかさず客が飛かより、兩手を攔んでぐつと引入、刀の下緒手ばしかく、格子の柱にがんじがらみ、しつかと締付、侍、小春騒ぐな覗くまいぞ」と、いふ所に亭主夫婦立歸り、是はと騒けば、「ア、

身次第一俺の爲
才儘にして

ぼざいたーレヤ
がつた

のめらサーのつ
けにそらす
頬がまちー頬げ
た
踏さがサー踏み
ちやーくくる

苦うない。障子越に拔身を突込暴れ者、腕を障子に括り置く。思案あり繩解な。人立あれば所の騒ぎ。サア皆奥へ。小春おじや往で寐よふ「少あい」とはいへど見知り有脇指の、つかれぬ胸にはつと貫き、少「酔狂の餘り色里には有習ひ。沙汰なしに往なして遣らしたら、ナア河庄さん私やよさそふに思ひやす」侍「いかなく身次第にして皆はひりや。小春こちへ」と奥の間の、影は見ゆれど縛られて、格子手がせに悶搔ば締め、身は煩惱に繋るゝ犬に劣つた生恥を、覺悟極めし血の涙、しほり泣こそ不便なれ。ぞめき戻りの身すがら太兵衛「扱こそ河庄が格子に立たは治兵衛めな。投てくれん」と襟かい攫で引擔く。「あ痛た」太「あいたとは卑怯者。ヤアこりや縛付られた。扱は盜ぼざいたな。ヤいき拘摸めどう拘摸め」とては、はたとくらはせ、「ヤ強盜めヤ獄門め」とては蹴飛かし、「紙屋治兵衛盜して縛られた」と、呼わり叫けば行かふ人、あたり近所も駆集まる。内より侍飛で出、盗人呼りはをのれか。治兵衛が何盗んだ。サア叶せ」と、太兵衛をかい掴み、土にぎやつとのめらせ、起れば踏付踏のめしく、引捕て「サア治兵衛踏で腹るよ」と、足元に突付るを縛れながら頬がまち、踏付く踏さがされて土塗れ、立上て睨まはし、太「四邊の奴原よふ見物して踏せたナア。一々に面見覺えた、返報する覺えておれ」

へらザロー負け
ぬ口

人立すけば一人
が少くなる

にペー變想

と、滅す口にて逃出す。立寄人々どつと笑ひ、「踏れてもあの願。橋から投て水食はせ。遣なく」と追駈行。人立すけば侍立寄て縛めとき、頭巾取たる面躰。造ヤア孫右衛門殿兄者人。アツア面目なや」とどうと座し、土にひれ伏泣るたる。「扱は兄御様かいの」と、走り出る小春が胸ぐら取て引居へ、造畜生め狐め、太兵衛より先うぬを踏たい」と、足を上れば孫右衛門、「ヤイくく」其たはけから事起る。人をたらずは遊女の商賣、今日に見へたか。此孫右衛門はたつた今一見にて女の心の底を見る。二年余りの名染の女、心底見付ぬ狼狽者。小春を踏足で狼狽たをのれが根生をなぜ踏ぬ。エ、是非もなや。弟とは云ながら三十に追掛り、勘太郎おすゑといふ六ツと四ツの子の親。六間口の家踏しめ、身代潰ると辨なく、兄の異見を請ることか。舅は伯母聲、姑は伯母じや人親同然。女房おさんは我爲にも従弟。結合々々重々の縁者親子中、一家一門參會にも、をのれが曾根崎通ひの悔みより外、餘の事は何も無い。最愛は伯母者人、連合五左衛門殿はにべもない昔人。噂の甥子に倒され娘を捨てた。おさんを取返し、天満中に恥かよせんとの腹立。伯母一人の氣扱ひ、敵に成味方に成病に成程心を苦しめ、をのれが恥を包まるゝ恩しらず、此罰たつた一ツでも、行先に的が立。斯ては家も立まじ。小春が心底見届け、其上の一

此亭主に云々
此茶屋の主人に
工夫して貰ひた
り
小詰役者―下廻
りの役者

月頭―一月一日
二月一日と毎月
の初めに取交す

思案、伯母の心も安めたく、此亭主に工面し、をのれが病の根元見届くる。女房子にも見かへしは尤。心中よしの女郎、ア、お手柄。結構な弟を持、人にも知られし粉やの孫右衛門、祭の練衆が氣違かつるに指ぬ大小ほつこみ、藏屋敷の役人と、小詰役者の眞似をして、痴を盡した此刀、捨所がないはいやい。小腹が立やらおかしいやら、胸が痛い」と齒ざしみし、泣顔かくす十面に、小春は始終むせ返り、「皆お道理」と計にて、詞も涙にくれにけり。大地を叩て治兵衛、「誤つたく兄者人。三年前よりあの古狸に見入られ、親子一門妻子迄そでになし、身代の手縛れも、小春と云ふ屋尻切にたらされ後悔千万。ふつより心残らねば尤。足も踏込まじ。ヤイ狸め狐め屋尻切め、思ひ切た證據は見よ」と、肌に懸たる守袋、「月頭に一枚づつ取交したる起請合せて廿九枚、戻せば戀も情もない。こりや請取」とはたと打付、「兄者人、彼奴が方の我等が起請數改め請取て、此方の方で火にくべて下され。サア兄きへ渡せ」小春心へやした」と涙ながら、投出す守袋孫右衛門押開き、「ひいふうみいよ廿九枚數揃ふ。外に通女の文。是や何じや」と開く所を、小春、そりや見せられぬ大事の文」と、取付を押退け、行燈にて上書見れば、「小春様參る、紙屋内さんより」讀も果すさあらぬ顔にて懷中し、孫は小春、最前は侍算利

女房限一親しき
女房にも見せぬ
意か

しなしたりし
くじつた

無心中一疎物

福憑云々一福徳
に満つ天満の
神、その名を取
て天神橋といふ
かみは正直一正
直の頭に神宿る
の謎をとれり

今は紛やの孫右衛門商ひ冥利、女房限つて此文見せず、我一人披見して、起請共に火に
入る。誓文に違はない「少ア、忝い。夫で私が立ちます」と又伏しづめば、造「ハア〜
ハアうぬが立の立ぬとは人がましい。是兄者人、片時も彼奴が面見ともなし。いざ御座れ。
去ながら此無念口惜さどふもたまらぬ。今生の思ひ出、女が面一ツ踏。御免あれ」と、つ
つと寄て地圍太踏、「エ、く、く、しなしたり。足かけ三年戀し床しも最愛可愛も、今日と
いふ今日、たつた此足一本の暇乞」と額ぎはをはつたと蹴て、「わつ」と泣出し兄弟つれ
歸る姿もいたく、數、跡を見送り聲を上、歎く小春も酷らしき、無心中か心中か、誠の心
は女房の、其一筆の奥深く、誰が文も見ぬ戀の道、別れてこそは 三重歸りけれ。

中之卷

福徳に天満神の名を直に、天神橋と行通ふ、所も神のお前町、營む業も紙店に、紙屋治
兵衛と名を付て、千早振程賞に来る、かみは正直商賣は、所がらなり老舗なり。夫が
火燵に轉寐を、枕屏風で風ふせぐ、外は十夜の人通り、見世と内とを一締に、女房おさ
んの心配り。さん「日は短かし夕飯時、市の側迄使にいて、玉は何して居る事ぞ。此三五郎

釘つめたき事
の聲

知らん迄知らぬ
なり迄は例の助辭
もふく〜負ふ
にか

伯父様一兄様と
いふべきを子供

めが戻らぬ事。風が冷たい二人の子共が寒からふ。お末が乳の呑たい時分も知ぬ、阿房には何が成。辛氣な奴じや」と獨言、「母様一人戻つた」と、走り歸る兄息子。さん「ヲ、勘太郎戻りやつたか。おすゑや三五郎は何とした」勘宮に遊んで乳呑たいと、お末のたんと泣やりました」さん「そふこそく。こりや手も足も釘になつた。父様の寐て御座る火燵へあたつて暖まりや。此阿房めどふせふ」と、待兼見世に駈出れば、三五郎只一人のらくとして立歸る。さん「こりやたはけ、お末は何處に置いて來た」三ア、ほんに何處でやら落してのけた。誰ぞ拾たかしらん迄。何處ぞ尋て來ませふか」さんをのれまあく大
事の子を、怪我でも有たらぶち殺す」と、叫く所へ下女の玉、お末を背なかに、玉おふく
最愛や辻に泣て御座んした。三五郎守するならろくにしや」と、わめき歸れば、さん「ヲ
可愛やく乳呑たからふの」と、同じく火燵に添乳して、「是玉其阿房の變える程打擲
しやく」と、いへば三五郎かぶりふり、「いやくたつた今、お宮で蜜柑を二ツづつ食
はせ、私も五ツ食ふた」と、阿房の癖に輕口だて、苦笑する計なり。玉ヤ阿房にかよつ
て忘りよとした。申々おさん様。西の方から粉屋の孫右衛門様と、伯母御様連立てお出
なされます」さん「是はくそんなら治兵衛殿起そ。なふ旦那殿起さしやんせ。母様と伯

の口を假りて云
よ
まつとまかせ
よしきた

二分の云々一
分八分でもう二
分あれば二分の
勘定といふ意と
勘太郎とかく
結構—心のよい
事

「聞く物か」の句
を昇す

父様がつれ立てござるゆな。此短かい日に商人が、晝中に寢に振を見せては、又機嫌が悪からふ」造「おつとまかせ」とむつくと起き、算盤片手に帳引寄せ、造「二天作の五、九進が三進、六進が二進、七八五十六」に成伯母打連て、孫右衛門内に入ば、造「ヤ兄者人伯母様、是はよふこそく先これへ。私は只今急な算用いたしかより。四九三十六、三六が一、八八分で、二分の勘太郎よお末よ、婆々様伯父様お出じや、煙草盆持ておじや。一三が三、夫おさんお茶上ましや」と口ばやなり。伯母「いやく茶も煙草も呑には來ぬ。はおさん、いかに若いとて二人の子の親。結構な計みめではない。男の性の悪いは皆女房の油断から。身代破り女夫別れする時は、男ばかりの恥じやない。ちと目をあいて氣にはりを持やいの」といへば、孫「伯母様愚なこと。此兄をさへ欺す不覺悟者、女房の異見など暖かに。ヤイ治兵衛、此孫右衛門をぬくくと欺し、起請迄かやして見せ。十日も立ぬになんじや請出す。エ、うぬはなあ小春が借錢の算用か置をれ」と、算盤をつ取庭へぐはらりと投捨たり。造「是は近比迷惑千万。先度より後、今橋の問屋へ二度、天神様へ一度ならではしきより外出ぬ私。請出す事は扱置、思ひ出しも出すにこそ」伯母「いやんな云やんな。夕部十夜の念佛に講中の物語、曾根崎の茶屋紀の國屋の小春といふ白人に、天満

賣買高い一世習
辛い世の中はみかへる一元
の悪性に戻る

の深い大じんが外の客を追退、直に其大臣が今日明日に請出すとの是沙汰。賣買高い世
の中でも、金とたはけは澤山なといろくの評判。こちの親父五左衛門殿常々名を聞ぬ
いて、「紀の國屋の小春に天満の大じんとは治兵衛めに極つた。鼻の爲には甥なれど、こ
ちは他人、娘が大事。茶屋者請出し女房は茶屋へ賣をらふ。著類著そけに疵付られぬ間
に取返してくれふ」と、杏脱半分下りられしを「そうぐしい神妙にも成ことを、明さ暗
さ聞届て上のこと」と押宥め、此係右衛門同道した。孫右衛門の咄しには今日は昨日の
治兵衛でない。曾根崎の手も切れ本人間の上々と、聞ば跡からはみかへる、そもいかなる
病ぞや。そなたの父御は伯母が兄、最愛や光譽だうせい往生の枕を上、「聲なり甥なり、治
兵衛が事頼む」との一言は忘れねど、そなたの心一ツにて、頼まれしかひもないはいの」
と、かつぱと伏て恨泣。治兵衛手をうち、「ハア、よめたく。取沙汰の有小春は小春な
れど、請出大じん大きに相違。兄きも御存じ、先日暴れて踏れた身すがらの太兵衛、妻
子眷屬持ぬ奴。金は在所伊丹から取寄る。とつくに彼奴めが請出すを私に押へられ、此
度時節到來と請出すに極つた。我ら存じも寄らぬ事」と、いへばおさんも色を直し、「假
令私が佛でも男が茶屋者請出す、其最辰せふはづがない。是計は此方の人に微塵もうそ

かたむくろ一頑
周一遍
櫻山より云々
孫右衛門が懷中
より出す牛王の
誓紙に紙治が縁
切る血判をする
也

梵天一天地創造
の神
帝釋一人間を守
る神

心ぞ直に一知ら
ぬが佛

はない、母様證據に私が立ます」と、夫婦の詞割符も合、「扱はそふか」と手を打て、伯母は心を安めしが、「ム、物には念を入ふこと。先々嬉敷。とても心おち付たため、かたむくろの親父殿、疑ひの念なきやうに、誓紙書すが合點か」治「何が扱千枚でも仕らふ」伯母「いよく満足」則道にて求めし」と孫右衛門懷中より、熊野の牛王の村烏、比翼の誓紙引かへ、今は天罰起請文、小春に縁切思ひ切。偽り申にをひては、上は梵天帝釋、下は四大の文言に、佛ぞろへ神ぞろへ、紙屋治兵衛名をしつかり、血判をすへてさし出す。さん「ア、母様伯父様のお蔭で、私も心落付、子中なしてもついに見ぬ堅め事。皆悦んで下さんせ」伯母「ヲ、尤々此氣に成ば堅まる。商事も繁昌しよ。一門中が世話かくも皆治兵衛爲よかれ。兄弟の孫共可愛さ。孫右衛門おじや、早ふ歸つて親父に安堵させたい。世間がひへる子共に風ひかしやんな。是も十夜の如來のお蔭。是から成共お禮念佛、南無阿彌陀佛」と立歸る、心ぞ直に佛成。門送りさへそこくに、敷居も越や越ぬ中、火燵に治兵衛又ころり。被る蒲團の格子島、さん「まだ會根崎を忘すか」と、あきれながら立寄て、蒲團を取て引退れば、枕につたふ涙の瀧、身も浮計泣るたる。引起し引立、火燵の櫓につき居、顔つくくくと打ながめ、さん「あんまりじや治兵衛殿。夫程名殘惜くば誓紙書ぬが

亥の子—亥の日

いんげんこきー
隘口いよ

よいはいの。一昨年せきぜんの十月じふがつなかの亥この子に、火燧こたつあけ明しやうぎた祝いざな義ぎとて、まあ爰こゝで枕まくら竝ならべて此こゝかた、女房にようばうの懷中ふろしころには、鬼おにが住すか蛇じやが住すか、二年にふたとしといふ物もの巢すもり守もりにして、漸やう／＼母はは様さま伯おじ父ちち様さまのお蔭かげで、睦むつしい女夫めをとこらしい寢物ねものがたり話わもせふ物、と樂たのしむ間まもなくほんに酷ひどいつれない。左程さほど心こゝろ残のこらば泣なしやんせく。其その涙なみだが蜷川しやみがはへ流ながれて小春くんの汲くみで吞のみやらふぞ。エ、曲まがもない恨うらめしや」と、膝ひざに抱だ付つき身を投なけ伏ふく、口説くちごとたてよぞ歎なげきける。治兵衛ちへいゑ眼まなこをし拭ぬひ「悲かなしい涙なみだは目めより出いで、無念むねん涙なみだは耳みみから成なり共とも出でるならば、云いはずと心こゝろも見みすべきに、同おなじ日ひよりこほると涙なみだの色いろの變かはらねば、心こゝろの見みへぬは尤もつとも々く。人ひとの皮かわ著きた畜ちく生しやう女にやが名な残のこりも絲瓜へちまもなん共ともない。遺恨ゐこん有あり身みすがらの太兵衛たへいゑ、金かねは自由じゆう妻さい子しはなし、請出うけだス工面ぐめんしつれ共、其時そのとき迄までは小春くんめが、太兵衛たへいゑが心こゝろに從したがはず、「少すこしも氣遣きづかひなされな。假令たとへこな様さまと縁切えんきりれ添そはれぬ身みに成なたり共、太兵衛たへいゑには請出うけだされぬ。もし金かねせきで親方おやかたから遣やるならば、物ものの見事けんじに死しんで見みしよ」と、度々たび／＼詞ことばを放はなちしが、是見このみや退のいて十日じふにちも立たぬうち、太兵衛たへいゑめに請出うけださると腐くさり女をんなの四よッ足あしめに、心こゝろはゆめく、殘のこらね共、太兵衛たへいゑめがいんげんこき、「治兵衛ちへいゑ身代みんだい往い著きつての、金かねの手話てづまつて」なんどと、大坂中おほさかぢゆうを觸ふ廻まはり、問屋中とみやぢゆうのつき合あひにも、面つらをまぶられ生恥いさはぢかく、胸むねが裂される身みが燃もえ。エ、口惜くちをしい無念むねんな。熱あつい涙血なみだちの涙なみだねばい涙なみだを打越うちこへ熱鐵ねつてつの涙なみだが溢こぼ

ハウ夫なれば云
云一此一句斷腸

女子は我人云々
一女は誰ても事
あれば夫れ一方
に思ひ詰るもの
敗亡一閉口

新銀七百五十匁

るよ」と、どうど伏て泣ければ、はつとおさんが興さめ顔。さん「ヤアウハウ夫なればいと
しや、小春は死にやるぞや」治「ハテサテなんほ利發でも流石町の女房じやの。あの無心
中者なんの死なふ。灸をすへ藥吞で命の養生するはいの」さん「いやそふでない、私が一生
いふまいとは思へ共、隠し包でむざぐざ殺す其罪も恐ろしく、大事の事を打明る。小春
殿に無心中芥子程もなけれ共、二人の手を切せしは此さんがからくり。こなさんが浮々
と、死ぬる氣色も見へし故、余り悲しさ、女は相見互ひ事、切れぬ所を思ひ切、夫の命
を頼むく」とかき口説た文を感じ、「身にも命にもかへぬ大事の殿なれど、引れぬ義理
合思ひ切」との返事。私や是守に身をはなさぬ。是程の賢女が、こなさんとの契約違へ、
おめく太兵衛に添ふものか。女子は我人一むきに、思ひ返しのないもの、死にやるは
いのく。ア、ア、ひよんな事。サアサアサどふぞ助てく」と、騒げば夫も敗亡し、
治「取返した起請の中、しらぬ女の文一通兄きの手へ渡りしは、おぬしから往た文な。夫
なれば此小春死ぬるぞ」さん「ア、悲しや。此人を殺しては、女どしの義理立ぬ。まづこ
なさん早ふ往てどうぞ殺して下さるな」と、夫に縋り泣沈む。治「夫とても何とせん。半金
も手附を打、繋ぎ取て見る計。小春が命は、新銀七百五十匁呑さねば、此世に止むる事なら

—享保銀は以前の四費銀の四倍の價ありて七百五十匁が四ツ印も四費銀三貫目に當る
打みしやいでても一身をはたいて
ないませ—色々糸でなうた
紅、無いにかく四々の云々—
貫六百匁は新銀四百目をさし後一貫四百目は著物の代
ひらりと云々—
密笥をあけると藍色の八丈縞あり
曲げ一貫に入る
萬の葉ののき—
もちよ—と落して置いて壁に
葛の葉のき心と云ふ咄をとれり
(松の落葉五)

す。今の治兵衛が四ツ三貫匁の才覺、打みしやいでも何處から出る」さん「なふ仰山な。夫で濟ばいと易し」と、立て簞笥の小ひきだし、明て惜氣もなひませの、紐付袋押開き投出す一包、治兵衛取上、「ヤ金か。然も新銀四百目、こりやどふして」と、我置ぬ金に目覺る計なり。さん「其金の出所も跡で語れば知れること。此十七日岩國の紙の仕切銀に才覺はしたれ共、夫は兄御と談合して商賣の尾は見せぬ。小春の方は急な事。そこに四々の一貫六百匁と、まあ一貫四百匁」と大ひき出の錠明て、簞笥をひらりと飛八丈、けふ縮緬の明日はない夫の命しら茶うら。娘のお末が兩面の紅絹の小袖に身を焦す。是を曲ては勘太郎が、手も綿もない袖なしの、羽織も交て郡内の仕末して著ぬ淺黄裏、黒羽二重の定紋丸に萬の葉の、のきも退れもせぬ中は、内裸でも外錦、男かざりの小袖迄、さらへて物數十五色。内ばに取て新銀三百五十匁、よもや貸ぬといふことは、無い物迄も有顔に夫の恥と我義理を、一つに包む風呂敷の、中に情を籠にける。さん「私や子共は何著いでも、男は世間が大事。請出して小春も助け、太兵衛とやらに一分立て見せて下さんせ」と、いへ共始終さし俯、きしく泣て居たりしが、魚手付渡して取とめ、請出して其後、圍ふてをくか、内へ入るにしてから、そなたは何と成ことぞ」と、云れては

子供の乳母か
此一句に思はず
涙を備さしむ

爪を剃す一女が
男に心中立する
所作色道大鑑一
間を渡す一間に
合せる
につこり云々一
笑ふふといふ所
却て斷腸

ようか歸一親し
き者には御出て
といはずして御
歸りといふ

つと行當り、さん「アツアそふじや。ハテ何とせふ。子供の乳母か飯糰か、隠居成共しませふ」とわつと叫び伏沈む。道「余りに冥加恐ろしい。此治兵衛には親の罰天の罰佛神の罰は當らず共、女房の罰一つでも將來はよふない筈。免してたもれ」と手を合せ、口説歎けば、さん「勿躰ない、夫を拜むことかいの。手足の爪をはなしても、皆夫への奉公。紙問屋の仕切銀、何時から著類を質に間をわたし、私が箆笥は皆明殻。夫惜いとも思ふにこそ。何いふても跡へんでは返らぬ。サア、早ふ小袖も著かへて、につこり笑ふて往かしやんせ」と、下に郡内黒羽二重、島の羽織に紗綾の帯、金ごしらへの中脇指、今宵小春が血に染とは、佛や知召さるらん。道「三五郎爰へ」と風呂敷包肩に負せて供につれ。銀も肌身にしつかと付、立出る門の口、「治兵衛は内にお居やるか」と、毛頭巾取て入を見れば、南無三寶舅五左衛門。「是は扱折も折よふお歸りなされた」と、夫婦は轉動狼狽ゆる。三五郎が負たる風呂敷もぎ取て、どつかと坐り尖り聲、吾女郎下につつからふ。聲殿は珍らしい。上下著飾り脇指羽織、天晴よい衆の金遣ひ。紙屋とは見へぬ、新地へのお出か、御精が出来ます。内の女房いらぬ物。おさんに暇遣りや、連に來たと、口に針有苦しい顔。治兵衛はとかふの言句も出ず、さん「父様今日は寒いによふ歩かし

やんす。先お茶一ツ」と茶碗をしほに立寄つて、「主の新地通ひも最然母様孫右衛門様お
出なされて、段々の御異見熱い涙を流し、誓紙を書ての發起心。母様に渡されしがまだ
御覽なされぬか」五「ヲ、誓紙とは此ことか」と懐中より取出し、「阿房狂ひする者の起
請誓紙は、方々先々書出し程書ちらす。合點が往かぬと思ひく來れば案の如く、此ざ
までも梵天帝釋か。此手間て去狀書け」と、ずん／＼に引裂て投捨てたり。夫婦はあつ
と顔見合せあきれて詞もなかりしが、治兵衛手をつき頭をさけ、「御立腹の段尤共お佗
申すは以前のこと。今日の只今より何事も慈悲と思召し、おさんに添せて下されかし。
譬は治兵衛乞食非人の身と成、諸人の箸の余りにて身命は繋ぐ共、おさんは急度上にす
へ、憂め見せず辛いめさせず、添ねばならぬ大恩有。其譯は月日も立、私の勤方身
上持直し、お目に懸れば知るよこと。夫迄は目を塞いでおさんに添せて給はれ」と、は
らはらこぼす血の涙、疊に喰付佗ければ、五「非人の女房には猶ならぬ、去狀書く。お
さんが持參の道具衣類、數改めて封つけん」と、立寄ば女房あはて、「著物の數は揃ふて
あり、改むるに及ばぬ」と駈塞がれば、突退ぐつと引出し、五「コリヤどぶじや」又引
だ出してもちんからり。有たけこたけ、引出しても、繼ぎれ一尺あらばこそ。葛籠長持衣

利運云々―自分の運に乗じて人の事を顧みぬ

裳櫃、「是程からになつたか」と、舅は怒の眼玉もすはり、夫婦が心は今更に、明け悔敷浦島の、火燧蒲團に身を寄せて、火にも入たき風情なり。吾此風呂敷も氣遣」と引ほどき取散し、「さればこそく、是も質屋へ飛すのか。ヤイ治兵衛、女房子共の身の皮はぎ、其金でおやま狂ひ。いけどう拘賊め。女房共は伯母甥なれど、此五左衛門とはあかの他人。損をせふよしみがな。孫右衛門に斷り兄が方から取返す。サア去狀く」と、七重の扉八重の鎖、百重の圍みは遁ると共、遁れがたなき手詰の段。造「ヲ、治兵衛が去狀筆では書ぬ是御覽せ。おさんさらば」と脇指に手をかくる。縋り付てさん「なふ悲しや。父様身に誤りあればこそ段々の佗言。あんまり利運過ました。治兵衛殿こそ他人なれ、子共は孫可愛ふは御座らぬか。わしや去狀は受取ぬ」と、夫に抱付聲を上、泣叫ぶこそ道理なれ。吾「よいく去狀いらぬ。女郎こい」と引立る。さん「いや私や往かぬ。飽もあかれもせぬ中を、何の恨に晝日中、女夫の恥は晒さぬ」と泣佗れ共聞入す。吾「此上に何の恥。町内一ぱい喚いて行」と、引立ればふり放し、小腕とられよろくと、よろめく足の爪先に可愛やはたと行あたる、二人の子共が目覺し、「大事の母様なぜ連て行、祖父様め。今から誰と寐よふぞ」と慕ひ歎けば、さん「ヲ、いとしや、生れて一夜もかよが

朝ぶさー朝食前
に食ふもの（俚
言集覽）

くわ山ー桑山、
子供の氣附藥

瀨にせんー蜺川
即ち曾根崎を逢
瀨にせん
一字書ー字づ
つ離して書く
こよさー御用
心
下女子ーいたく
更けたといつて
下女が上町から
來るとなり

短檠ー低き燈臺

肌を放さぬもの。晩からは父様と寐しやや。二人の子共が朝ぶさ前忘れず、必くわ山香
せて下され。なふ悲しや」と、いひ捨る。跡に見捨る子を捨る。藪に夫婦の二股竹永き
別れと三重

下之卷

戀なさけ爰を瀨にせん蜺川。流るよ水も行通ふ、人も音せぬ丑滿の、空十五夜の月冴て、
光りは暗き門行燈、大和屋傳兵衛を一字書。眠りがち成拍子木に、番太が足取千鳥足、
「ごよざく」も聲更たり。「駕籠の衆いかふ更たの」と上の町から下女子、迎ひの駕籠も
大和屋の、潜ぐはらくつと入、「紀伊の國屋の小春さん借やんしよ。迎ひ」とばかり
ほの聞へ、跡は三ツ四ツ挨拶の、程なく潜によつと出、下女小春様はお泊じや。駕籠の衆
直に休ましやれ。ア、いひ残した是花車さん、小春様に氣を付て下さんせ。太兵衛様へ
身請がすんで、金請取たりや預かり物。酒過させて下んすな」と、門の口から明日待ぬ、
治兵衛小春が土に成、種蒔ちらして歸りける。茶屋の茶釜も夜一時、休むは八ツと七ツと
の間にちら付短檠の、光も細く更る夜の、川風寒く霜みてり。「まだ夜が深い送らせまし

よ。治兵衛様のお歸りじや、小春様起しませ。夫呼ませ」は亭主が聲。治兵衛潜をぐはさとあけ、「コレく傳兵衛、小春に沙汰なし。耳へ入れば夜あけ迄くよられる。夫故よふ寐させて抜て往ぬる。日が出てから起していなしや。我等今から歸ると直に、買物の爲京へ上る。大分の用なれば、中拂ひの間にあふ様に歸るは不定。最前の金でそなたの算用合も仕廻、河庄が所へも後の月見の拂といふて、四ツ百五十匁請取とつて給らふし、と福島西悦坊が佛壇買った奉加、銀一枚回向しやれと遣つてたも。其外に懸り合は、ハア夫よく、磯市が花銀五、是計じや仕廻て寐やれ。さらばく戻つて逢ふ」と、一二足三足行より早く立歸り、「脇指忘れたちやつとく。なんと傳兵衛、町人はこゝが心易い。侍なれば其儘切腹するであろの」馬我ら預かつて置てとんと失念。小刀も揃ふた」と、渡せば取てしつかどさし、並是さへあれば千人力。もふ休みやれ」と立歸る。「追付お下りなさりませ。よふ御座りま」もそこ／＼に、跡は櫃をごとりと、物音もなく鎮まれり。治兵衛はつとと去ぬる顔。又引かへす忍び足。大和屋の戸に縋り、内を覗いて見る内に、間近き人影びつくりして、向ひの家の物影に過る間暫し身を忍ぶ。弟故に氣を碎く、粉屋孫右衛門は先にたち、跡に丁稚の三五郎が、脊中に甥の勘太郎連れ、行燈目あ

しつかどさし—
門鎖しにかく
御座りまも—ま
すと間もなくと
かく

甥—負ひをか

てに駈來り、大和屋の戸を叩き、蚤ちと物問ませふ。紙屋治兵衛は居ませぬか。ちよつと逢せて下され」と呼ばれば、「扱は兄き」と治兵衛は身動きもせず猶忍ぶ。内から男の寐ほれ聲、「治兵衛様はまちつと先に、京へのほるとてお歸りなされた。爰にでは御座らぬ」と、重て何の音なひも、涙はらく孫右衛門、「歸らば道で逢そな物。京へとは合點がゆかぬ。ア、氣遣ひで身がふるふ。小春をつれては行ぬか」と、胸にきつくり横たはる、心苦しさをこたへかね、又戸を叩けば、男夜更て誰じや。もふ寐ました」蚤御無心ながら一度お尋ね申たい。紀伊の國屋の小春殿は、お歸りなされたか。もし治兵衛と連立て行はなされぬか」男ヤヤ何じや小春殿は二階に寐てじや」蚤ア先心が落付た。心中の念はない。何處にかぐんで此苦をかける。一門一家親兄弟が、片唾を呑で臟腑を揉とはよも知るまい。舅の恨に我身を忘れ、無分別も出よふか、と異見の種に勘太郎を連て尋るかひもなく、今迄逢ぬは何ごと」とほろく涙の一人言、隠るよ間の隔てねば、聞へて治兵衛も息を詰、涙呑込計なり。蚤ヤイ三五郎、阿房めが夜るくうせる所外には知らぬか」といへば、阿房は我名ぞと心へて、三知て居れど爰では恥かしようていはれぬ」蚤知て居るとはサア何處じや。云て聞せ」三聞た跡で吐らしやんな。毎晩ちよ

市の側云々―注
賣婦の住所
ごくにも立ぬ―
役に立たぬ

くるく―云々―
暖すること
せきく―咳と
愈くとかく

こく行所は、市の側の納戸の下「孫大だはけめ、夫を誰が吟味する。サアこい裏町を尋ねて見ん。勘太郎に風ひかすな。ごくにも立ぬ父めを持つて、可愛や冷たいめをするな。此冷たさで仕廻ばよいが、ひよつと憂めは見せまいか」憎やくの底心は不便くの裏町を、いざ尋んと行過る、影隔たれば駈出て、跡懐かしけに伸上り、心に物を云はせては、鴛十悪人の此治兵衛、死に次第共捨置れず、跡からあと迄御厄介。勿躰なや」と手を合せ、伏拜みく、「猶此上のお慈悲には、子共がことを」と計にて、暫し涙に咽びしが、「兎ても覺悟を極しうへ、小春や待ん」と大和屋の、潜の透間さし覗けば、内にちら付人かけは、小春じやないか。待としらせの合圖の咳、エヘンくかつちく、忍へんに拍子木打ませて、上の町から番太郎が、くるくたぐる風の夜は、せきく廻る火用心。「ごよざくく」も人忍ぶ、我には辛き葛城の、神隠れして遣り過し、透を窺ひ立寄ば、潜内からそつと明く。鴛小春か「少待てか。治兵衛様早ふ出たい」と氣をせけば、せく程廻る車戸の、明るを人や聞付んと、しやくつてあくればしやくつて響き、耳に轟く胸の中。治兵衛が外から手を添ても、心震ふに手先も震ひ、三分四分五分一寸の、先の地獄の苦みより、鬼の見ぬ間と漸に、明て嬉しき年の朝、小春は内を抜出て、

足をはかり一歩
ける限り行く

謠の本は一諸本
は近衛流の文字
で書いてあるよ
り出てたにきま
つてゐる
野郎云々一役者
の帽子は紫にき
まつてゐる
次兵衛一原本の
まゝ
根掘云々一委し
く印刷して世上
に賣出す
跡老松一追と老
とかく
一首の歌一梅は
とび櫻は枯るゝ
世の中に松ばか
りこそつれなかり
けれ(橋嶋曉
筆)

互たがひに手てに手とりを取とりかはし、北きたへ行いふか南みなへか。西にしか東ひがしか行ゆく末すえも、心こころの早瀬はやせ蜺川しづがは流ながるよ
月つきに逆さからひて、足あしをはかりに三重

名ごりの橋づくし

走はしり書がき、謠うたひの本ほんは近衛流このゐりう、野郎やろう帽子ぼうしは若紫わかしき、惡所あくじよ狂くるひの身みの果はは、かくなり行ゆくと定さだまり
し、釋迦しやくかの教をも有あることか、見たうたし憂う身みの因果いんぐわ經きやう、明日あすは世よ上の言ことば草くさに紙屋しや次兵衛しんぢやうが心しんぢやう中
と、仇名あだな散ちり行ゆく櫻木うきぎに、根彫ねほり葉はほりを繪ゑ双紙ふたじの、板いた摺する紙かみの其中なかにに、有あ共ともしらぬ死し神かみに、
誘さそはれ行ゆくも商賣しやうばいに、疎うそき報ひくいと觀念くわんねんも、とすれば心こころひかされて、歩あゆみ惱なやむぞ道理道理成なる。比ころは
十月じふがつ十五ご夜やの、月つきにも見みへぬ身みの上うへは、心こころの闇やみの印しるしかや。今いま置ま霜しもは明日あす消きる。はかなき
警たごの夫おとよりも、先さきへ消行きえゆく閨くわいの内うち、いとし可愛かほいとしめて寢ねし、移うつり香かも何なにと、冷泉ながれ流ながるの蜺川しづがは
西にしに見みて朝夕あさゆふ渡る此橋こゝのの、天神てんじん橋はしは其昔むかし、菅丞かんしやう相あひまと申まをせし時とき、筑紫つくしへ流ながされ給たまひしに、
君きみを慕したひて太宰府たざいふへ、たつた一飛梅田橋ひつひめだはし、跡老松あとおいまつの綠橋きぬはし、別わかれを歎なげき悲かなしみて、跡あとにこ
がるよ櫻橋うきはし、今いまに咄はなしを聞渡きわたる、一首いっしゆの歌うたの御威徳みゑとく、追お斯かる尊たうき荒神あらがみの、氏子うぢこと生なれし
身みを持もて、そなたも殺ころし我われも死しぬ、元もとはと問とへば分別ぶんべつの、あのいたいけな貝かひがら殻がらに、一杯はい

舟入橋一舟がへるに
るに

天満橋一天魔に
かく
一つ刃の云々一
一つ刃で死んで
三途の川を渡る

夏書一夏九十日
の間に經文或は
借する佛の名號
を多く書留る
事
法一乗りをか
く、信を得る事
をへては終へて
也

もなき蜺橋。短かき物は我々が歌此世の住居秋の日よ、十九と廿八年の、今日の今宵を
限りにて、二人命の捨所。爺と婆との未迄も、まめで添はんと契りしに、丸三年も名染
いで、此災難に大江橋。あれみや浪花小橋から、舟入橋の濱傳ひ。是迄來れば來る程は、
冥途の道が近付と、歎けば女も縋り寄り、小もふ此道が冥途か」と、見交す顔も見へぬ程
落る涙に堀川の、橋も水にや浸るらん。「北へ歩めば我宿を、一目に見るも見返らず。子
共の行衛女房の、哀も胸に押包み、南へ渡る橋柱、數も限らぬ家々を、いかに名付て八
軒家。誰と伏見の下り舟、著ぬ内に」と道急ぐ。「此世を捨て行身には、聞も恐ろし天満橋
歌淀と大和の二ア川を、一ツ流の大川や、水と魚とは連て行。我も小春と二人連、一ツ
刃の三ツ瀬川、手向の水に受たやな。何か歎かん此世でこそは添ず共。未來はいふに及
ず、今度のく、つよと今度の其先の世迄も夫婦ぞや。一ツ蓮の頼みには、一夏に一部
夏書せし、大慈大悲の普門品、妙法蓮華京橋を、地蔵和讃越れば到る彼岸の、玉の臺に法
をへて、佛の姿に身御成橋。衆生濟度がまよならば、流の人の此後は、絶て心中せぬや
うに、守りたいぞ」と及びなき、願ひも世上のよまひ言、思ひやられて哀れなり。野田の
入江の水煙り、歌山の端白くほのぐくと、あれ寺々の鐘の聲、こうく「かふしていつ迄

か、とても存らへ果ぬ身を、最期急がん此方へ」と手に百八の玉の緒を涙の玉に繰ませて、南無あみ島の大長寺、藪の外面のいさよ川、流れ漲る樋の上を、最期所と著にける。尚なふいつ迄うかく歩みても、爰ぞ人の死に場とて、定まりし所もなし。いさ爰を往生場」と、手を取土に座しければ、少さればこそ死に場は何處も同じことと云ながら、わたしが道々思ふにも、二人が死に顔並べて、小春と紙屋治兵衛と心中と沙汰あらば、おさん様より頼みにて、殺して呉るなころすまい、挨拶切と取替せし其文を反古にし、大事の男を唆しての心中は、さすが一座流の勤めの者、義理しらす偽り者と、世の人千人万人より、おさん様一人のさけし、恨み妬みもさぞと思ひ遣り、未來の迷ひは是一つ。わたしを爰で殺して、こなさん何處ぞ所をかへ、ついと側で」とうちもたれ、くどけば共にくどき泣、治ア愚痴な事ばかり。おさんは舅に取りかやされ、暇を遣れば他人と他人。離別の女になんの義理。道すがらいふ通り、今度のくすんど今度の、先の世迄も女夫と契る此二人。枕を並べ死るに、誰が誘う誰が妬む」少サア其離別は誰がわざ。わたしよりこなさん猶愚痴な。身軀がああ世へ連立か。所々の死にをして、譬へ此からだは鳶鳥につよかれても、二人の魂付纏はり、地獄へも極樂へも連立て下さんせ」と、又

三界一此世

妻子珍寶云々
大集經にある句

共に亂る―切り
棄てし髪と共に
亂る

粗木―水門の上
の村

伏沈み泣ければ、造ヲ、夫よく、此からだは地水火風、死れば空に歸る。五生七生朽せぬ夫婦の、魂放れぬ印合點」と、脇指ずはと拔はなし、元結ぎはより我黒髪、ぶつとと切て、造は見や小春。此髪の有内は紙屋治兵衛と云ふおさんが夫。髪切たれば出家の身、三界の家を出、妻子珍寶不隨者の法師。おさんといふ女房なれば、おぬしが立る義理もなし」と、涙ながら投出す。「ア、嬉しうござんす」と小春も脇指取上、洗ひつ漉つ撫付し、酷や惜けも投鳥田、はらりと切ッて投捨る。枯野の芒夜半の霜、共に亂るよ哀れさよ。造「浮世を遁れし尼法師、夫婦の義理とは俗の昔、逆もの事にさつぱりと、死場もかへて山と川、此樋の上を山となぞらへ、そなたが最期場。我は又此流れにて縊り、最期は同じ時ながら、捨身の品も所も替て、おさんに立抜く心の道。其抱帶此方へ」と、若紫の色も香も、無常の風に縮緬の、此世あの世の二重まはり、樋の粗木にしつかと括り、先を結んで狩場の雉子の、妻故我も首しめくよる良結。我と我身の死拵へ、見るに目もくれ心くれ、少こなさん夫で死なしやんすか。所を隔て死ぬれば、側に居るも少の間。爰へく」と手を取合、「刃で死ぬるは一ト思ひ。さぞ苦痛なされうと、思へばいとしいく」と、とどめかねたる忍び泣。造「首くよるも喉つくも、死ぬるに

ひよんな事—と
んでもない事

牛王—熊野牛王
の札には數多の
鳥の形の判あり

愚の有物か。よしない事に氣をふれ、最期の念を亂さず共、西へ〜と行月を、如來と拜み目を放さず。只西方を忘りやるな。心残りの事あらばいふて死にや」「小」何にもない〜。こなさん定てお二人の子達の事が氣にかよろ」「鳥」アレひよんな事いひ出して又泣しやる。父親が今死ぬる共、何心なくすや〜と、可愛や寐顔見るやうな。忘ぬは是は「つかり」とかつばと伏て泣しづむ、聲も争ふ群鳥、嗚はなれて鳴聲は、今の哀れを問ふやとて、いとど涙を添にける。「鳥」なふあれを聞や。二人を冥途へ迎ひの鳥、牛王の裏に誓紙一枚書たびに、熊野の鳥がお山にて、三羽づつ死ぬると、昔より云傳へしが、我とそなたが新玉の、年の始に起請の書初め。月の始月頭、書し誓紙の數々、其度毎に三羽づつ、殺せし鳥は幾許ぞや。常には可愛〜と聞、今宵の耳へは其殺生の恨の罪、むくひ〜と聞ゆるぞや。報ひとは誰ゆへぞ、我故辛き死をとぐる。ゆるしてくれ」と抱き寄せ、「小」いやわし故」と締寄て、顔と〜をうち重ね、涙に閉る鬢の髪、野邊の嵐に冰けり。後に響く大長寺の鐘の聲、南無三寶長き夜も、夫婦が命短か夜と、早明渡る晨朝に、最期は今ぞと引寄て、跡迄残る死顔に、泣顔残すな残さじと、につと笑顔のしろじろと、霜に凍ゑて手も慄ひ、我から先に目もくらみ、刃の立どもなく涙。迨ア、せく

頭北面―死者は頭を北にし面は西に向ける法なり
 有縁無縁―有縁も無縁も悉く利益を與へる、平等の下に利益の二字を累すなり
 瓢―盛死者の首に譬ふ譬ひの綱島―網にて衆生を救ふにかく、次の目は網の縁

まいくく「小早ふく」と女が勇むを力草、風誘ひ來る念佛は、我に勸むる南無阿彌陀佛、彌陀の利劍とぐつと刺され、引すへてものり返り、七ツ顛八倒こはいかに、切ッ先咽の笛を外れ、死にもやらざる最後の業苦、共に亂れて苦みの、氣を取直し引寄て、鏝元迄さし通したる一刀、剝る苦しき曉の、見果ぬ夢と消果たり。頭北面西右脇臥に羽織打著せ、死骸を繕ひ、泣て盡せぬ名残の袂、見捨て抱帶を手繰寄せ、首に良を引掛る。寺の念佛も切回向、「有縁無縁乃至法界、平等」の聲を限りに樋の上より、追一蓮托生南無阿彌陀佛」と踏はづし、暫し苦むなり瓢、風に揺ると如くにて、次第に絶る呼吸の道いきせきとむる樋の口に、此世の縁は切果たり。朝出の漁夫が網の目に、見付て、「死んだヤレ死んだ。出合く」と聲々に、云廣めたる物語。直に成佛得脱の、誓ひの綱島心中と、目ごとくに涙をかけにけり。

